

大学等名 県立長崎シーボルト大学  
 テーマ名 テーマ1：地域活性化への貢献  
 取組名称 『シーボルトキャラバン - 生と性の主人公になろう』  
 取組学部等 全学  
 取組担当者 看護学科 教授 小林美智子  
 取組期間 平成16年度～平成18年度  
 Webサイト <http://www.sun.ac.jp/Siebold/gendaigp/>

### 取組の概要

この事業は、相次いで長崎県で起こった思春期の子どもによる殺傷事件に対して、本学の特質、資源を活かし、小中学校における「いのちの学習」を主とした継続的な地域支援活動の取組である。「いのちの学習」とは、第二次性徴が現れる思春期の子どもたちが、自分のいのち・性について学んでいく思春期教育活動である。対象は小学生高学年、中学生で、総合的学習・保健体育・家庭科・道徳等の時間を利用して、本学の教職員、学生がキャラバン隊を組織し、小中学校に出かけ実施する。方法は講義・実習・実技・実験という授業形態と、ワークショップによる個別カウンセリングを組み合わせ、いのちと性について学んでいくものである。プログラムは大学が独自に開発した。子どもたちの身体と心に包括的に働きかけようと、性教育の範囲にとどまらず、食育、運動、環境、平和、死、地域について総合的に学習し、心身ともに健康に生きることの喜びについて実感させる。また、PTA活動、地域保健活動、生涯学習等と連携し、この取組が地域の子育て支援ネットワークづくりにつながることを期待した。また、思春期の子どもたちと学生ボランティアによるワークショップを通して、学生自身も自分の生と性について考え、学ぶことで、将来地域のピア・リーダーとして育つことを目的とした。

### 実施の経緯・過程

実施に当たって、各市町の教育委員会に事業の説明をし、学校長会に紹介され、学校長と教職員が賛同した小中学校で実施した。大学が作成したプログラム(表1)の中から実施校が項目を選択し、総合的学習の時間を利用して実施した。内容によっては大学の演習室、実験室を使用し、その時は中学生をバスで移動させた。いのちと身体に関しては、看護栄養学部の教員が、いのちと社会に関しては、国際情報学部の教員が担当した。いのちの起こりといのちと性は学外講師に依頼した。ワークショップの参加学生は全学から募集した。小中学生に理解されやすいように工夫(ビデオや模型などの使用)をした。大学生と生徒のワークショップは、大学生がロールプレイでテーマを紹介し、それを見て生徒が1グループ8～10人の班に分かれ、各班に大学生が1人ずつ入りディスカッションした。結果を各班が模造紙に書き発表した。ワークショップはプログラムの開始前と終了後に実施した。各年度の実施状況は表2参照。

県立長崎シーボルト大学「シーボルト生と性の主人公になろう」

実施年度 NO	テーマ	担当	備考
1	生と性について語ろう	シーボルト 大学看護学科 小林美智子教授他学生ボランティア	ロールプレイによる学習の導入、ワーキンググループ構成、大学生と小学生とともに学ぶ、SODOL調査票を用いて事前調査を行う。
2	いのちのあじ 人間の生命の始まりについて解説。人間は せむせむのスタートであり、この世に同じ命 は存在しない。	長崎大学医学部 教授	
3	いのちの育ち	シーボルト 大学看護学科 奥田友子講師他	大学演習室を活用。妊婦健診体験 や赤ちゃんモデル人形での実習
4	いのちと食① 母乳哺育の大切さについて	シーボルト 大学看護学科 小林美智子教授	
5	いのちと食② いのちにとって食べ物がど のような働きをするのか、いのちに必要 な食事ができる力を第一歩とする目的で、 日々の食事の献立を通してプログラムを通じて 栄養指導を行う。	シーボルト 大学栄養健康学科 武藤美子助教	
6	いのちと生を伝える講演会(全体会)	助産師	対象→学生、生徒、父兄、教諭
7	いのちと社会① 社会に生きるには 法律・人権の事を通して	関西大学社会学部 教授	
8	いのちと社会② コミュニケーションと言葉	シーボルト 大学看護学科 橋本 徹教授	
9	いのちと社会③ 情報の大切さと情報の 方	シーボルト 大学情報メディア学 科教員	大学演習室を活用
10	いのちを生き延びさせるには 運動の大切 さ	シーボルト 大学栄養健康学科 園分恵明助教	大学体育館を活用
11	いのちの連鎖①	シーボルト 大学栄養健康学科 西室子佳康教授	
12	いのちの連鎖② いのちの危機の話を聴こ う	シーボルト 大学看護学科 小林美智子教授他	老人クラブ等
13	赤ちゃん(いのち)になろう	シーボルト 大学看護学科 小林美智子教授他	乳児健診、保育所
14	いのちと性の主人公になろう(全体会)	シーボルト 大学看護学科 小林美智子教授他学生ボランティア	ワークショップ

表2

表1

実施年度	実施校数		実施回数	延べ参加学生ボランティア数	延べ派遣教員数
	小学校	中学校			
H16年度	0	1	6	30	5
H17年度	1	5	29	232	35
H18年度	3	6	26	204	26
合計	4	12	61	466	66

H18年度の中学校には高校1校を含む

<平成16年度実績>

学校名	対象学年(生徒数)	日時	授業名	教員名	学生ボランティア数	備考
諫早市立森山中学校	2年生(80名)	10/7(木)	ワークショップ	小林 美智子	21	
		10/7(木)	いのちのおこり	長崎大学 増崎 英明		
		11/17(水)	かがやくいのちのために	山本 文子		保護者向け
		12/19(日)	生きる私たちと憲法	松井 修視		
		1/19(水)	たべるとは生きること	武藤 慶子		9
		1/21(金)	たべるとは生きること	武藤 慶子		

<平成17年度実績(抜粋)>

学校名	対象学年(生徒数)	日時	授業名	教員名	学生ボランティア数	備考
諫早市立森山中学校	1年生60名	7/5(火)	「生と性の主人公になろう」	小林 美智子		
		10/13(木)	「いのちのおこり」	長崎大学 増崎 英明		
		10/20(木)	「たべるとは生きること」	武藤 慶子	14	テレビ取材
		10/28(金)	「いのちとことば」	綿巻 徹		
		11/16(水)	「輝くいのちのために」	山本 文子		1~3年
		2/27(月)	「ワークショップ」	小林 美智子	17	
長崎市立橘中学校	3年生234人	6/7(火)	「ワークショップ」	小林 美智子、島田 友子	36	
		6/16(木)	「いのちのおこり」	長崎大学 増崎 英明		
		7/11(月)	「たべるとは生きること」	武藤 慶子	16	2グループ
			「人生の食のスタートは母乳で!!!」	小林 美智子		同時開催
		10/24(月)	「ことばといのち」	綿巻 徹		
		11/8(火)	「輝くいのちのために」	山本 文子		保護者向け
		12/13(火)	「いのちと死」	松本先生		
2/23(木)	「ワークショップ」	小林 美智子	16			
諫早市立湯江小学校	4~6年生241名	10/14(金)	「ワークショップ」	小林 美智子、島田 友子、	43	5、6年生
	(4年生80名)	11/24(木)	「ワークショップ」	小林 美智子、島田 友子	13	4年生
	(5年生78名)	11/24(木)	「いのちのおこり」	長大 増崎先生		
	(6年生83名)	12/20(火)	「すこやかに生きるための食事学 - たべるとは生きること」	武藤 慶子		保護者向け
		1/25(水)	「すこやかに生きるための食事学 - たべるとは生きること」	武藤 慶子	22	6年生

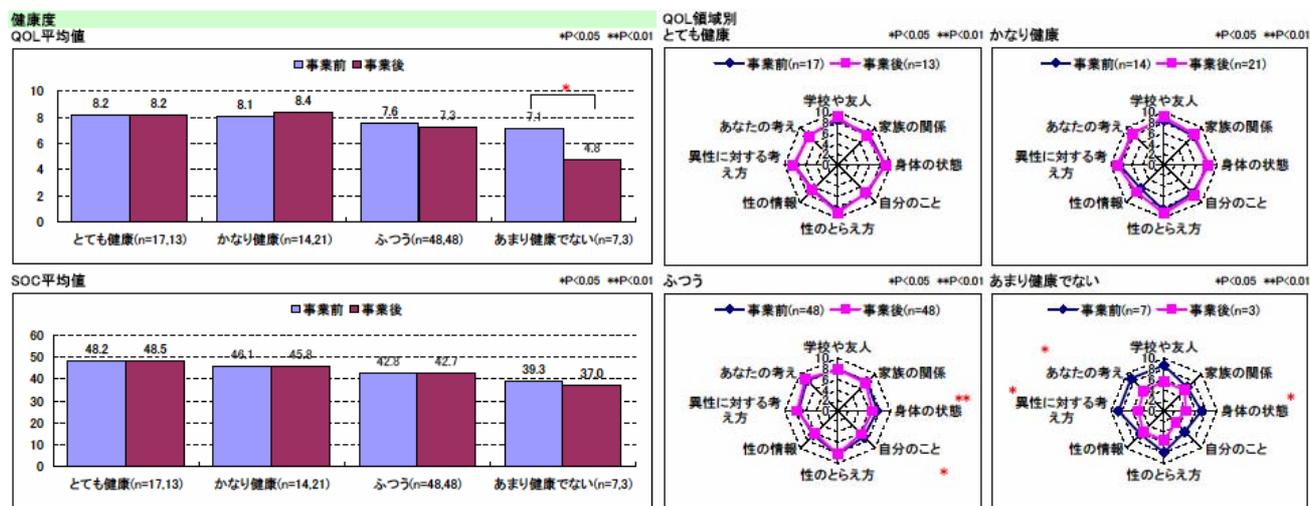
<平成18年度実績(抜粋)>

学校名	対象学年(生徒数)	日時	授業名	教員名	学生ボランティア数	備考
諫早市立森山中学校	1年生84名	6/19(月)	「ワークショップ」	小林 美智子	14	
		7/6(木)	「いのちのおこり」	長崎大学 増崎 英明		
		10/19(木)	「赤ちゃんだっこ体験事前指導」	小林 美智子	9	
		10/23(月)	「赤ちゃんだっこ体験」	小林 美智子	9	
		1/26(金)	「食べることは生きること」	武藤 慶子	34	
		2/21(水)	「ワークショップ」	小林 美智子	5	
長崎市立橘中学校	3年生208人	6/26(月)	「ワークショップ」	小林 美智子	41	
		7/13(木)	「いのちのおこり」	長崎大学 増崎 英明		
		12/21(木)	「運動の大切さ」	綱分先生	5	
		2/22(木)	「パネルディスカッション」	小林 美智子	7	

目的に対する成果、人材養成面での達成度

いのちについて多角的にアプローチすることで、性をも含めて自分のいのちについて考えることができ、相手のいのちも大切に出来るように自立に向けて成長することを目的とし、そのために食べること、運動すること、話すことの大切さ、社会に良く生きるために大切な日本国憲法と人権、そして情報社会の問題などを理解することを目標とした。授業を受けた後の生徒の感想文からほぼ達成され

た。また、ワークショップに参加した学生、特に養護教諭、教職志望の学生にとって小・中学生に直接接することでよい実習体験になったとの感想を得た。学生自身の問題として生と性を考える機会にもなり、中学生に良く伝わるように工夫し、中学生の考えを引き出すなど力をつけることが出来た。プログラム開始前と終了後にQOLとSOC（健康生成力）の調査票を用いて調査し事業の評価の一助とした。



### 自大学の教育改革への影響、他大学等への波及効果、地域社会等への波及効果

本学と長崎県立大学(平成20年に統合予定)との合同FD研修会でGPの授業の一部を紹介し、これからの大学教育を考える一助とした。

18年度には、GPの事業を知った県の定時制高校から、いのちと性の講演の後、ワークショップの希望があり実施した。中学時代に不登校体験の生徒がほとんどであったが大学生とのワークショップで少しずつ心を開いた様子に高校関係者が驚き、GPの効果に感動した。

### 学生等の評価

取り組みを終えた実施校と大学生ボランティアから寄せられた感想を以下に記す。

#### <実施校>

本校では、シーボルト大学との連携事業について10時間を総合的な学習の時間で確保しました。そのうち、最初と最後の2時間は学生とともに活動をおこないました。そして残りの6時間の講演については、事前に来校していただき、講演内容を提示してもらい、生徒にアンケートをとって希望するものを選びました。そのため、生徒も興味・関心が高く、講演については比較的熱心に取り組んでいました。

最初の活動は、学生と男女交際のあり方について一緒に考えるものでした。内容は、援助交際を中心に取りあげて、考えました。反省会では、進め方や生徒が知らないことがあり、その説明についてもきちんとしてできるようにしたいという反省が学生からあり、教師側としても勉強になりました。

そして、最初の講演は、「いのちのおこり」について講演してもらいました。生命誕生の過程を見る中で、いのちの尊さやおなかの中での赤ちゃんの様子、性について学んでいました。つぎに「いのちと死」については、近年の若者の自殺なども含め、死というものについて真正面から考え話の中からのいのちを大切にすることを学びました。最後に運動の大切さについては、実際に動いてみる中で、脈を計測したり活動しながら自分の身体の反応を知り、運動のあり方などを学んでいました。

最後に、まとめの時間としてディスカッション形式で、意見を自由に出し合う中で、今までのまとめをおこないながら、生と性の主人公になるとういうことを根底に、いのちの大切さや自分自身を大切にすることについて深く考えることができたのではないかと思います。

中学校生活の中で生徒たちは、男女の関わり方や性について悩んだり、考えたりする多感な時期であります。その中で、保健体育の時間など性について学んではいりますが、その他の時間で考えることは少な

いといえるのではないかと思います。家庭の中でもしっかりと話し合い、親の思いなどをしっかり聞き、自分を大切にすることやいのちの尊さについて学ぶいい機会を与えてもらったと思います。シーボルト大学の小林教授をはじめ、忙しい中、こちらの時間に合わせて都合をつけていただき、夏の暑いときや冬の寒いときに体育館の中で講演をしていただいた先生方には、本当に感謝しています。今後も継続して続けていただけるのであれば、中学校側としても連絡を密に取り合いながら日程調整をすすめ、関わるのであれば積極的に協力していきたいと思いますので、今後ともよろしくお願ひしたいと思います。本当にありがとうございました。

#### <大学生ボランティア>

今回が初めてのGPだったので、ものすごく緊張しました。私が中学生のころはタバコを吸ったり、お菓子を食べたり、眉毛のない人がいたりしたので、中学生と聞いて不安だったけれど、M中学校の学生は積極的で素直な人ばかりだったので非常に楽しかったです。

2年生のAさんと組んでグループワークをりましたが、初めて話したということもあり、コミュニケーションが上手に取れていなかったのが、事前にもっと打合わせをするべきだったと反省しました。

導入の講義について、掲示媒体の使用や質問によって学生の関心を得ることができ、講義内容がうまく伝わっていたと思います。特に、料理のバランスに関する理解度が高く、その後のカードゲームをスムーズに行うことができました。

カードゲームについては、「自分が1日に食べたい献立」を作成する時間が十分にあった点がよかったです。しかし、「食事バランスガイドについての説明」後の評価判定の時間が献立作成の時間に比べて短く、色塗りに時間がかかった学生は自分の献立の問題点を考える時間がまったく取れていませんでした。90分間という短い時間内に講義をすることは大変だと思いますが、食事のバランスを学ぶことが今回の目的なので、評価判定の時間を多くとるべきであったと考えます。

さらに、評価判定後にもう一度カードを使って献立を考えてもらうことによって、学習内容がより身に付くのではないかと感じました。

GPを通じて私たちとは違う世代の人に触れることで、自分が持っている知識や技術をどのように活かして伝えていけばよいのかが少しわかったように思います。

今後もこのような機会があればぜひ参加していきたいです。

#### 学外からの評価

民間のテレビ局2社から取材の申し込みがあり、中学校の了解のもとにワークショップの現場を取材し番組で報道された。また、本学のGPのホームページを見て島根県隠岐の島より希望があり、小・中学生に「生と性の主人公になろう」の講義を実施した。

#### 取組支援期間終了後の展開

3年間この取組を実施してきて、中学校側から継続して欲しいとの要望が強く、大学独自の事業として平成19年度から継続実施している。大学と実施学校の担当教諭と良く話し合いそれぞれの役割をはっきりさせ、よりよい内容になるように工夫している。特にいじめが原因で不登校や自殺にいたる児童、生徒が多い現代思春期の子ども達がどの子も自分のいのちと性を大切に、やさしさと勇気をもって成長することを願ひ、QOLの高い思春期を送れるようにシーボルトキャラバンを継続していく。大学生と生徒のワークショップの効果は大きく、大学生が参加しやすいようにボランティア科の単位制を考えているところである。